ソール・ベローの『雨の王ヘンダーソン』についての一考察

A Study of *Henderson Rain King* by Saul Bellow

西口　正宏

NISHIGUCHI Masahiro

ソール・ベローは、巨大な政治力、軍事力を持ったアメリカに対して懐疑的な考えを抱いていた。ソール・ベローは両親がロシアからカナダに移住したユダヤ人であること、あのホロコーストを経験した民族ということで、彼は政治には大いに関心を寄せていた。ソール・ベローは多作の作家と言えないが、彼は『雨の王ヘンダーソン』、従来のアメリカ文学には見られないような実験的な小説とも言えるような『オーギーマーチの冒険』を世に出した。それらは彼なりの思想から生まれた作品であろう。前者には、第二次世界大戦以降国際政治で他国を圧倒し、そして資本主義の旗手として、世界経済を支配し、世界の警察官と言われるほど、他国の紛争に介入したりしたアメリカを皮肉っている部分も窺えるのである。アメリカは時には強引ともいえる軍事介入をしたり、政治的な干渉をした歴史的な事実があり、ベローはそれを『雨の王ヘンダーソン』の中で、ギャグ的に入れていることである。彼は世界政治、とりわけアメリカ、旧ソ連の冷戦時代に鋭敏な程の神経の使い方をしているのである。彼は学生時代からかなり革新的な思想に共鳴をして、経済学、経済思想史、哲学等には特に関心を持っていた。彼は一時期『パルチザン・レビュー』にいたこともあり、彼はそこに出入りしている人々の関係で政治への興味を失うことはなかった。彼らの小説を書くエネルギーの根源となっていたのは、アメリカで置かれているユダヤ系アメリカ人の社会的地位であった。ユダヤ系アメリカ人の評論家として高名なライオネル・トリリングは、1930年代のアメリカにおけるユダヤ人の立場について「あるひとは、自分が例えば社会的な階級のカテゴリーを用いているということを意識しないでユダヤ人についてずっと長く考えることは出来ない。それは単に一般社会に対する関係でユダヤ人を考えるばかりでなく、ユダヤ人としてユダヤ人について、そしてかなり沢山あり、なにはともあれあるひとの認識と関心を要求したユダヤ性についての一般的な概念に対する非常に複雑な関係を持っている彼らの間にある階級の相違について考えるのに必要である」(*THE LAST DECADE ESSAYS AND REVIEWS 15*) この言葉は、ある人間がユダヤ人という言葉を使用するときに、彼は自己の置かれている階級を勿論意識していることは当然過ぎることであろう。1930年代はヨーロッパで第一次世界大戦とほぼ時を同じくして反ユダヤ人主義が生まれ、それがアメリカに持ち込まれたのであった。彼の題材がほぼ定型化していることは否めない事実である。彼の小説の中身は、自我、資本主義、ユダヤ人、彼らのアメリカ化の問題、エリス島、ホロコースト、死等で占められている。彼と同じように政治的な関心を異様に持っていたのがノーマン・メイラーである。彼は『どうして我々がベトナムに』で介入という理不尽な戦争の兵士たちの大きな心の戦争を描いており、奇妙にも最後までベトナムという言葉が出てこないのである。「ベトナム戦争は伝統的—あるい

は非伝統的—アジアの魂への一連の戦いというよりもアメリカ人自身の中での精神的な苦しみとして見ることが現在当たり前のことである」(*Four postwar American novelists 101*) という考え方も成立しない訳でもないが、やはりバーナード・マラマッドも彼と同じようにロシア系ユダヤ人を両親としているが、彼もやはりユダヤ人を中心に作品を書いている。ユダヤ系アメリカ人の作家達は無意識にアメリカの社会でユダヤ系の人々のための、あるいはワスプに対しての啓蒙をやっていた。

『新しい生活』で、ソローの影響を多分に受けたレヴィンが片田舎の大学に赴任して、保守的な英文科の在り方に疑問を持ち改革案を出し、次期科長に立候補するが、科長であるギリーと決定的な対立をしたり、『ドゥービンの生活』ではローレンス的な関係がドゥービンとファニーの間で繰り広げられたりする。ベローとマラマッドの作品を比較するのは容易でないが、前者は主人公がユダヤ人ということを強く意識しているものの、ワスプとは協調的であり、そして彼の交際範囲が概してユダヤ人中心であるが、後者の主人公はユダヤ人ということを強く意識し、それを臆面も無なく曝け出し、そしてワスプに対しては非常に闘争心旺盛であり、常に将来を見据えて行動する勇敢さを持っている。前者の作品は理詰めすぎるくらいのストーリーの展開を見せ、時にはそれが主人公の行動を矛盾せしめるという欠陥を生み出しているが、後者にはそれが殆どなく、かなりゆったりとした背景の中で進んでいくので、小説を読む楽しさは前者に優っているようである。前者はかなり政治的であるが、後者はソロー、エマソンの影響もあり自然的である。彼らに絶対的に共通しているのは、ユダヤ民族が受けた迫害を文学的に糾弾し、なおかつその作品を後世に残そうとする熱烈な気持ちであろう。彼らに最も共通しているのは、ユダヤ民族が受けた迫害を作品で訴えることを使命として考えていることである。500万にとも言われているナチによるガス室でのユダヤ人の虐殺であり、前者はそれを『サムラー氏の惑星』で書いた。『サムラー氏の惑星』の主人公は、ポーランド出身のユダヤ系アメリカ人であった。この作品は一見すると彼の周辺の出来事、あるいは彼を取り巻く人間の会話、彼の関心事等が非常に堅苦しい程の文体で書きつづられているが、しかしこの作品の核心は、ベローの文明史観、人間とは何ぞや？人間の狂気、ナチによるユダヤ人の大虐殺である」(『宙ぶらりんの男』と『サムラー氏の惑星』について) そして彼は『ベノローサ・コネクション』でその大虐殺に間接的に言及しているが、後者は『修理屋』で、帝政ロシアのメンデル事件をヒントに描き、その主人公が露帝を暗殺するという凄まじさで終わっている。彼は『借家人』でユダヤ人と黒人の対立を描いているが、彼らユダヤ人には、白人以外に黒人という手強い民族がいた。「黒人とユダヤ人の間の緊張は、非キリスト教徒というよりも、もっとしばしば言葉の上で非難する黒人の傾向を、ある程度黒人と異邦人の緊張の特徴的でない要素を含んでいる、そしてそれは地球上のすべての白人についての結論である。」(*The Harlem Ghetto* 9) 黒人はユダヤ人の踏み台という意識が非常に根強い。ジェームズ・ボールドインは、黒人に対する意識を次のように簡潔に述べている。「伝統的に最後に雇われ、最初に殺される黒人は仕事を見つけるのがかなり難しいことに気づき始めていた、しかし物価が無情にも高騰し、賃金は下がっていた」(*THE PRICE OF Ticket COLLECTED NONFICTION* 13) この文は1948年に書かれたものであるが、この意味するものは白人の黒人への差別であるが、公民権運動遙かより前のことだから当然あり得べきことである。そして三者の三つ巴の闘争が繰り広げられることになった。アメリカ文学の読者は一般的に

言うならば白人であろう、そうすると黒人はアフリカ系アメリカ人が書いた作品しか読まないということになる。ところでトニ・モリソンの黒人の側から見たアメリカ文学の読者と作者の関係はどのようなものであろうか。

ここでは説明する必要のない理由から、ごく最近まで、そして、作者がどの人種の人間であるかに関わりなく、事実上すべてのアメリカ小説の読者は白人として位置づけられてきた。わたしは、この想定が文学上の想像力にたいしてどういう意味をもっていたのか知りたいと思う。人種にたいする「無意識」、あるいは人種についての意識が、文学上の言語をいつゆたかにし、いつ貧しくしたのか。アメリカ合衆国のような、全面的に人種的偏見に支配されている社会において、作家としての自己は人種から超越させ、ほかのもすべてを人種で規定すれば、どういう結果になるのか。自分たちを「普遍的」で人種的偏見はない、と考えている読者の民族にたいして、または、それにもかかわらず、ある段階ではつねに自分の民族を代表しているという意識をもつ黒人作家の場合、その作家的想像力にとっては、いったい何が起こるのか。言葉を換えれば、どういうふうにして「文学上の白人性」、「文学上の黒人性」は作られるのか。(*『白さと想像力　アメリカ文学の黒人像』*　はじめに)

アメリカ小説の読者がすべて白人であるという想定は、白人の作家が読者を白人だと考えていることによろう、しかし逆に黒人作家は黒人を読者の対象として意識しているということになる。モリソンが問題にしているのは黒人の作家的創造力であるのだが、それが白人の想像力と質的に比較して優劣の差があるかというと、それはないのであろうか？ただ言えるのは、黒人の作家的想像力の範囲というかその広がりには確かに、白人のそれと比べて限定されることになるであろう。白人の作家は作品の中で黒人を描く場合に、白人中心の社会ではどうしても被支配的な黒人像になるところがある。黒人の作家では、黒人を書くときには、被支配者階級の弱い存在としての黒人はどうしても白人と対立した形を取らざるを得ないのであり、それは彼らにとって相当に不利な立場になるであろう。このような考え方に立つならば、明らかに文学上の言語の豊かさにおいて、黒人の作家は白人の彼らよりも劣ることになる。アメリカの白人が気軽に黒人という言葉を使っているが、当事者である黒人にはそれが無意識に言われている言葉であると歴史的な由来から考えるならば理解できないのであろう。

ベローは無数の作品を世に送り出しているわけでもないが、作品の中に織り込まれている彼の思想、文学観、人生観、哲学観等を見る格好のものと言えるのが、『心に深く根ざしたもの』ではないであろうか。この作品は森鴎外の『イタセクスアリス』のアメリカ版である。小説は、人間が如何に生きるかを社会派的に、心理的に、写実的に、ロマンス的に紙面上で具現化するのである。特殊な文学的表現であるかも知れないが、ベローは、『人間の絆』を書いたサマーセット・モーム、自己の外形的な特徴について書いたC.S.ルイスとは逆に人間の内面を追求した。「ルイスはまた自己と外形的な真実との間にある何か断絶を書いている」(*Modern Fantasy* 100) 今までの文学では、イギリス人とは、フランス人とはという問いが文学の主題として取り上げられたことはないであろうが、アメリカ文学では俗に言うアイデンティティが重要な文学的な要素になっていることは珍しくもない。だからアメリカではユダヤ系アメリカ人、アフリカ系アメリカ人、ヒスパニック系アメリカ人、中国系アメリカ人が文学の主人公として登場してくることになるのであるが、

多様性の社会を特徴とするアメリカならばこのような現象は当然であり、むしろ遅すぎるという観もある。

アメリカ文学の最長老になったベローはアメリカ人になり切る努力をしながら、やはりユダヤ人としての意識を捨て去ることができず、多分老境に達した今でもそれを持っているのである。ノーマン・メイラーは『裸者と死者』、『夜の軍隊』を世に送り出した。前者は戦争文学の傑作であるし、サリンジャーは『ライ麦畑でつかまえて』で若者の遊びを、『九つの物語』ではベローと同じように現代の文明が如何に毒されているかを描いた、ちなみにサリンジャーは禅に関心を持っていて、精神的なより所を求めている。サリンジャーは別として、ユダヤ系アメリカ文学の中でもベロー、マラマッドは特異な存在である。彼がアメリカ人になろうとして最大限の努力を払うところがある。『宙ぶらりんの男』で、主人公が何とか第一次世界大戦当時召集の来るのを待ちながら生活しているのであるが、彼は待ちきれないで兵士募集の事務所に出向き、書類に書き込み、夜のこととて、職員は誰もいなく、その書類を受け入れ箱に入れ、アパートに帰るという一場面があるが、これは作者の本物のアメリカ人になるという強い願望を象徴的に表現したところなのである。彼が半分ユダヤ人でありながらも、こよなくアメリカを愛していることは、『雨の王ヘンダーソン』を読めばたちどころに理解できるのである。「次の小説は、少し年齢の上の、そしてもう少し努力の出来るウイルヘルムの変形としてヘンダーソンを発展させた」(*Safe at Last in the Middle Years*1 31) ベローにとって作家としての信条より優先するものが一つ,p.あった。それは生きるということであった。「彼の義務は生きることであった」(*Herzog*, p.27) 人間生きてこそ、それだけで猛烈に価値を持っているのであり、そのことを彼は少年時代に会得したのであった。「この彼の地球上に存在できるということはハーツオーグにも貴重な意味として現れている。ベローの大病と言う体験は彼の生活に生涯大きな影響を与えていることは見逃すことは出来ないであろう」(『宙ぶらりんの男』と『サムラー氏の惑星』) ベローほど、完璧なまでにアメリカのユダヤ人を追求した作家は希有であろう。「しかし50年代の小説におけるもっとも手強い競争相手のメイラー違って、ベローはユダヤ性に満足していた。」と如何に彼らがアメリカで生きてきたのか、将来如何に生きるのであろうかという重大な問題提起を読者に投げかけ、彼らにその答えを求めてもいるようである・

多くの点で、アメリカのユダヤ人は、レビットタウンの赤いインディアンであった。第二次世界大戦後の時代は、勿論アメリカにおける都市の拡大の最初の偉大な時期であった、しかしそれは都市の拡張がアメリカ人の想像の中心的、困惑する面に至った最初の時代であった。社会学者、経済学者、政治家、小説家は都市の発展は民主的な人々の将来にとって最も重要な事実となったということを40、50年代に気づき始めた。都市は、最早19世紀にの人々にとって大いに象徴した週末の買い物、大酒盛りの中心ではなかったし、そこは第一次世界大戦の精神的に無味乾燥な荒地でもなかった。そこは生活が良きにつけ悪しきにつけ今後アメリカでなされる中でまったく明快なほど必然的な状況であった。(*Four Postwar American novelists Bellow Mailer, Barth and Pynchon* 8)

都市の巨大化は人間性を疎外し始め、病理的な現象を生み出した。「社会は、実際にヘンダーソンをうち砕いた、それは彼をあまりにもうち砕いたので、彼は自己の利己的な苦

悩を殺人的な力として見た。」(*Four Postwar American Novelists* 33)

彼を夜毎に悩ます「シタイ」、「シタイ」の精神的な療法として、彼はバイオリンを習うことにした。この代物は物置に放置されていた亡くなった父親のものであった。彼はニューヨークにまで持って行って、ハンガリー人の男性からレッスンを受けることにした。彼は地下室をバイオリンの練習場にして、音らしい音を出そうと特訓してみたが、所詮彼は特攻隊向きの男で、雄豚を追い回す無骨な男であり、「出てくる音は、卵入りの籠をたたきこわすような音ばかり。」(*Henderson The Rain King* 45) 彼は音楽家を諦め、そのために父親の水準を目指して見た。彼はあの内なる執拗な声である「シタイ」から逃避しようとしてバイオリンを始めたのであったが、彼は結局そこから逃れることが出来ずアフリカ行きを決心したのであった。「ぼくがアフリカへ行かずにいられなくなったのも、不思議はあるまい。前にも言ったように、涙と狂気の日がきまってやってくるのだ」(*Henderson The Rain King* 55) 彼のアフリカ行きの相棒となったのは、大戦中パットン戦車部隊のカメラマンだったチャーリーとその妻であった。彼らはまだ新婚早々であった。彼の目的はアフリカの人間と動物を撮影することであった。ヘンダーソンは彼らの結婚式に出席したとき、付添人としての役目をしたのであったが、彼はその役目として花嫁にキスをすることを忘れてしまったので、彼女はそのことを恨み、彼の敵となってしまっていた。「三週間チャーリーに協力して、カメラの備品を運んだり、写真に興味をもとうと努めているうち、例の不満が戻ってきて、ついにある午後、例の内なる声が聞こえ始めた。"シタイ、シタイ、シタイ"と叫ぶ例の声が」(*Henderson.The Rain King* 63) そのために彼は彼らと別れて単独行動に出ることになった。彼は彼らと別れる際にチャーリーの隊からロミラユともう一人の現地人二人を雇った。彼はチャーリーからジープを譲り受け、奥地へと出発した。彼らは出来る限り奥までジープで行き、そこにそれを盗まれないように草で覆い、ロミラユに贈ることを約束し、そこからパヴェンティまで飛行機を雇った。

彼のこの旅行目的は全ての精神的な物を捨て去ることにあった。ロミラユはどんどん奥地に進めばアーニュイ族に会えるというので、奥地へと入る決断をした。彼らが進んで行くと、平地に出た。そこで彼らが見たものは、牛を連れた一隊であり、その先頭には彼の娘のライスと同じ年頃の女の子がいた。彼らがよく見ると、その少女を含めて黒人たちが全員泣いていた。彼はロミラユに彼らの泣いている理由を聞くと、その答えは水不足のために死んだ牛のことを嘆いているということであった。ヘンダーソンは彼らのために何か役立つことはないかとロミラユに尋ねると、彼は一隊の一人と話をし出した。驚くべきことにその人物がヘンダーソンに寄ってきて、英語で話を始めた。その青年は外国留学の経験のある伯母を女王に持つプリンスであることが判明した。彼はウィラテールという女王の館に彼らを案内した。途中彼らはもの悲しい光景に出くわした。彼らの前には今にも息絶えようとしている牛のそばで膝まずき、泣いている白髪の50歳くらいの男性がいた。彼は自分を見捨てないようにと嘆願しているのであった。彼のすぐそばのところに相当な量のミスの入った貯水池があった。その貯水池には汚水源となっている莫大な数のおたまじゃくしが泳いでいた。アーニュイ族は、牛に生き物がいる水を飲ますことを禁じていたし、またその生き物を殺すことも御法度としていた。

女王の一体どうしてこのアフリカに来たのかという質問に対して、彼は「率直に言ってくださってありがとう。たしかに奇妙に見えるでしょう、ガイド一人を頼りに砂漠を越え

てはるばるやって来たのですから。それは健康のためだ、と伝えてほしい」(*Henderson The Rain King* 117) この「健康のためだ」というヘンダーソンの答えは、精神的なものを捨て去るというヘンダーソン自身が語る旅行目的と大いに矛盾するので、筆者はこれを精神的な健康のためという風に解釈せざるを得ないのである。

この時ヘンダーソンの最大の任務は、アーニュイ族の牛の飲み水として利用されている貯水池を占領している蛙を絶滅させることであった。彼はその全滅作戦として懐中電灯二個、マグナム銃の薬きょうから取り出した火薬とで間に合わせることにした。彼は懐中電灯に火薬を詰め、ガラスの蓋と小さな電球を取り外して、そこへ形を合せて削った丸い木切れをしっかりとはめ込んだ。そこにヒューズを通すための穴を開けこれで準備は完了だったが、問題は火薬がちゃんと爆発するかどうかであった。彼は靴紐をヒューズの代用品として利用した。「わかるよ。いまの状況はよく分かってるんだ。ただぼくは一つだけ言っておきたい。昨日も言ったことだが、ぼくはここの連中が大好きなんだ。ぼくの気持ちを表すために、ぜひ何かやりたい。それに外部からはいりこんできた人間として、当然これはぼくが引き受けるべき仕事と思っている」(*Henderson The Rain King* 150) 彼は猛烈な暑さの中を貯水池に何とか着いた。彼はライターに慎重に火を付け、その炎でヒューズの代用品である靴紐に点火した。彼は用意していた絆創膏をその板きれの穴に張り付け、その靴紐が燃え尽きた瞬間に、火薬の入った懐中電灯を池に投げた。その瞬間に水が高く舞い上がり、蛙の死骸も同時に舞い上がった。彼は爆弾が計画通りに爆発したと思い、イテロとロミラユに向かって「どうだい。まさか、ここまでうまくゆこうとは」(*Henderson The Rain King* 153) と叫び声をあげた。

だがその瞬間、すでに思いもかけぬことが起こり出していて、返答の叫びのかわりに、ぼくの耳にひびいたのは、黒人たちの発する悲鳴であった。何事かと見ると、池からは、蛙の死骸もろとも大量の水があふれ出してきた。爆発で下手の仕切り壁が吹っ飛んだ。大石がくずれ落ち、黄色い貯水池の水は、見る見るうちに減ってゆく。蛙の死骸といっしょに残りの水が、まるで水車の出口さながらにぐんぐん流れ出してゆくのを見ると、ぼくは成り行きに茫然として、吐き気さえおぼえながら、頭をかかえこんだ。(*Henderson The Rain King* 153)

予想外の爆発力で、ダムにもなっていたその貯水池の水は瞬時にして無くなってしまい、見えるのは底にある黄色い泥と蛙の死骸であった。黒人たちと牛はすでに姿を消していた。

彼はアメリカ人であることを忘れようとしてアフリカにやって来たのであるが、自己がアメリカ人であるということをここで強く思い知らされるのである。文明人は意識的に自然を理解しているつもりであるが、実際に自然と向き合うと全くの無能な人間であることを自ら露呈してしまうのである。現代は自我の喪失の時代であると言われて久しいが、人間は自己と他者、自己と社会、自己と文化等の問題で安易に妥協するか、拒絶するかである。ベローは、文明人としてのアメリカ人は、矛盾だらけの世界であるアメリカにいて悩みながらも生活するのが最前の手段であることを、自虐的にこの作品を通してアメリカ人、いや世界の文明人に強く訴えているのではないだろうか。もちろん彼のアフリカへの旅は心の中での旅であることは明白であろう。ベローは半分ユダヤ人でありながらも、アメリカに現実に生活していれば否応なくアメリカ人にならざるを得ないのであり、決してそこ

から逃避することは出来ないのであると、彼は同胞のユダヤ人に静かに本を通して語りかけているのである。「ベローは図々しさを感じながらワスプの地位を築いた文学者に自分の感情を出した」(*Saul Bellow A MOSAIC 32*)

ユダヤ系アメリカ人の主人公から出発したベロー文学は、どこかで変化を求める必要があった。彼の書く題材が限定されれば、それらの作品の内容はある範囲から抜け出せ得なくなり、彼は最後にジレンマに陥るであろう。「ベローは宙ぶらりんの男と犠牲者と同じような気持ちでオーギー・マーチを書き始めた」(*The Critical Response to Saul lBellow* 64) だからある意味では『雨の王ヘンダーソン』は、彼にとって真のアメリカの作家としての新しい旅立ちであった。しかし彼はアメリカのフォークナーの後継者としてその後多くの作品を発表しているが、その底流にあるのは前述した生きるということは別として自我の問題であった。彼は現代社会それも科学万能の風潮の中で人間の背骨であるべき自我の喪失、あるいは曖昧な自我を批判し、それを頑なに失わない人物の一人としてヘンダーソンを作り上げた。

彼は内部からこみ上げてくる強い意欲に駆られて、想像上のアフリカへと旅立つのである。「ベローの主人公は、自我の矛盾する概念によって悩まされている　—ある点で彼は外部の力によって脅かされている個性の分からないような大衆の一人である。もう一方で彼は人間の状況を超越する内なる存在である独自の自我を持っているようである」(*Quest for Salvation in Saul Bellow's Novels 42*) ベローは、主人公たちに現代社会という複雑な機構の中で自我を損ねないで生きるという理想の姿を描こうとした。「ベローはモダニズムをロマン主義と合わせて自我の主な敵として考えている。」(*Quest for Salvation in Saul Bellow's Novels 14*) そして彼は『雨の王ヘンダーソン』によって内省の文学から行動の文学へという質的な大変化を遂げたのであった。彼の言葉を借りれば“悲しすぎる”作品の『犠牲者』、『宙ぶらりんの男』から猪突猛進タイプのヘンダーソンを、創り上げた。彼自身『ハーツオグ』が最高の作品であると認めているが、自分自身に最も似たタイプはヘンダーソンであると言っているが、彼のこの発言を率直に理解していいのかどうかの判断に苦しむのである。

彼はヘンダーソンが求めていたのは“上質のもの”であると言っているのである。ところで彼がヘンダーソン型の人間でないことはもう一目瞭然ではなかろうか、彼は行動型ではなく、思索型であり、どちらかというと宙ぶらりんの男のタイプであろう。彼は小さい時に結核になり、入院を余儀なくされている。「彼は10才になる前から作家希望であり、グラマースクール時代に、彼は文を書いていた。彼は自分を興奮させたものの模倣を書いた。ベローはジャック・ロンドンを読み、彼の物語を書いた。彼はオー・ヘンリーを読み、物真似した」(*Saul Bellow A Biography of The Imagination* 7) このような幼年期のベローを考えれば、彼が行動型ヘンダーソンに似ていると想像することは無理であろう。彼にとり行動型のヘンダーソンが理想のタイプであったのであろう。しかし不思議にもヘンダーソンが恐れていたものは、死であり、そこからの逃避である、とベローは述べているのであるが、果たしてこれは真実であろうか？『雨の王ヘンダーソン』の最後の方は失敗であると、ノーマン・メイラーが指摘しており、彼もそれを認めているのである。ダフーが不慮の死を遂げると、ヘンダーソンはアフリカから逃げるように帰国するのであるが、何となくベローが辻褄合わせをするためにこの部分で死を持ち出したようなところがある。

確かにベローが、死というものを多くの作品の中に入れていることは事実である。『犠牲者』では、主人公の弟の子供の死、『この日を掴め』では、主人公が葬儀の列に入り込み教会で棺の中の死者を見て涙を流す場面が最後に出ているのである。

ベローが本当に死あるいは老いを真剣に見つめながら書いたのは『去り難き黄色い家』ではなかろうか。ハティーは死から逃げることなく、超過疎地で、それも隣人は全員老人という中で一日一日を積極的に生きて、万一に備えて遺言書をしたためる力強い老女である。短編として非の打ち所のない傑作であろう。

ハティーの物語は、彼女がどんどんと死に近かずいている時に、内省を通して彼女の生活について変化する視点を描いている。雨の王ヘンダーソンで出されている四つのテーマを持っている、それらはなおハティーの性格についての考えを明らかにている―死、独自性、精神的な覚醒それに愛である。ハティーの性格についての考えは自己超越の手段として愛についてのヘンダーソンの断言に対する反対から来ている。(*CHARACTER AND NARRATION IN THE SHORT FICTION OF SAUL BELLiOW* 60)

『去り難き黄色い家』でもベローは独自性を問題にしているのである。これはベロー文学の特徴の一つである、しかしベローは『雨の王ヘンダーソン』での長い、長いヘンダーソンの夢を見て、夢うつつの中で飛行機に乗ったのであった。ベローが“ヘンダーソン”をアフリカに行かせるという構想を持つきっかけとなったのはコンラッドの『闇の奥』の影響があるのかも知れないのである。ヨーロッパの帝国主義による搾取の象徴として、コンラッドはアフリカを描いたのであったが、ベローは、夢の中でアフリカを旅し、ダフーの死を目撃してそこを逃げ去り、現実のアメリカへと帰国するのである。「それはまたアメリカ社会における魂のない生活についての回想の中で、彼はバランスの取れていない関係を嘲笑するのと同じように調和のない内なる状態を非難し、現実を風刺しようとして狂気というレッテルをいまだに使っている」(*Figures of Madness in Saul Bellow's Longer Fictions* 7) 彼はこの“狂気”をいろいろな作品で使っている。「ソール・ベローのより長い小説を読むと、誰でもそれは熱狂、狂気、気違い、精神異常等について数多く言及している」(*Figures of Madness* 1) ビグラーはベローの主人公に対して狂気という烙印を押しているが、表面的には狂気に見えるかも知れないが、異常な情熱の持ち主と言った方が妥当ではなかろうか。ベローが本当に狙っていることは、読者が主人公を通して現代社会が如何に人間の精神を蝕んでいるかを知ってもらいたいという点なのである。

『雨の王ヘンダーソン』は彼の代表作品である『犠牲者』、『宙ぶらりんの男』と違って、本物のアメリカ人を書くことを狙った作品であろう。この二つの作品は、如何にユダヤ系アメリカ人が“本物のアメリカ人になりきる努力”をしたり、如何に彼らが“ワスプの犠牲”になっているかを強調したりするという大きな特徴を持っているのであるが、『雨の王ヘンダーソン』はそれらとは全く相反する様相を呈している。主人公はユダヤ系アメリカ人とは違って、ワスプの由緒正しき出身であり、思索型というよりも行動型のタイプであり、ヘミングウェイ、フォークナーの小説の世界に近いのではなかろうか。ヘンダーソンがアメリカからアフリカに行ったのは、自我の喪失を恐れ、そしてあるいはアメリカ人の象徴たる妻から逃避するための手段であった。

ヘンダーソンのアフリカへの冒険は完全な失敗に終わり、彼はダフーの“心の象徴”た

る白いライオンの子を持ってアメリカへと逃げ帰るクルツ的な人物である。ダフーは自己の王位を確固たるものにするには荒野にいる亡き父の後継者であるライオンを捕獲することであったが、彼は最後にそれを捉える仕掛けで反対派の策略で地上に落下し、致命傷を負い命を失ったのである。「しかし、ダフーは、面白可笑しく人間的な崇高さの本当に自然で田舎的な状態を求めているヘンダーソンを失望させている」(*Modern Critical Views SAUL BELLOW* 114) ワリリ族の王たるダフーから後継者だと言われていたヘンダーソンは王の死を知り、彼の形見のようなライオンを連れてアフリカを去ったのである。彼は一時的に自我を求め、アメリカの現実を逃れてアフリカの夢を見るのであるがダフーの死を知って狼狽するのである。ピファーはライオン・アティーを“死の生々ましい事実”と呼んでいるが、これはベローの言葉を信じての結果であろうか。自我を救済し、何かをアフリカで求めようとしたヘンダーソンは変身に成功したのであろうか？彼はもしかしたら本当に素朴な人間を求めてアフリカに出かけたものの、そこで出会った人間はやはり現代離れしたものではなく、アメリカ人の場合と同じように策略に満ちた世界であることに絶望したのではなかろうか。ヘンダーソンがこの絶望とダフーの死から逃れる手段は荒野たるアフリカから去ること、すなわち夢を見ることを止めることであった。「ダフーの死の象徴的な意味は、自然の状態に深く戻ることは人間にとって危険であるかも知れない」(*The Critical Responcse to Saul Bellow* 115) 彼は現実を直視することを教えられたのであった。「その後ヘンダーソンは脱出を計画することに注意を向けた時、彼の過去の相容れない自我のこういった痕跡は、ダフーへの愛とそして彼から学んだものに対する熟慮にかなわなくなる。新しく見開かれた目でもって、ヘンダーソンは亡くなった父親の自分への愛、自ら生きているという意識の中で彼は、その小説のいたるところでヘンデルのメシアの繰り返されるメロディーをきいた」(*Quest for Salvation In Saul Bellow's Novels* 60)

ヘンダーソンと同じように自我の求道者であるジョーゼフは、時代の波に敢えて逆らう宿命を背負って生きている。「彼は社会的な環境の威嚇するような仕組みと人間関係の荒廃する状況によって引き起こされた非人間的な過程に身動き出来ないでいる。」(*Quest for Salvation In Saul Bellow's Novels* 42) 現代社会でいかに自我を喪失しないで生きて行くかという問題いは、ベロー文学の特徴であり、ヘンダーソンも同様に夢という中で刹那的に自我を意識しないで生きることで自己満足しているのである。

> 世界を洞察するその手段は、それがどのようなものであるかという現実を決定する。言い換えるならば、現実は本当の中身を持っている言葉ではなく、ある人がそれを見る手段によって決定される。自我に対するこのような見方は、消極てきなものに変化させられている。ヘンダーソンは、自我が力を制約する手のなかの単なる担保でなく、変化を買い戻すことが可能であることを理解するようになる。自我は現実の著者となる。(*Quest for Salvation In Saul Bellow* 121)

動の文学である『雨の王ヘンダーソン』と対照的である静の文学である『宙ぶらりんの男』のジョーゼフもユダヤ系アメリカ人から時代の雰囲気の中でアメリカ人に変身する必要に迫られた。「ベローの主人公は自我について葛藤する考えに悩まされた。ある点で彼は外部の力で脅かされた無名の大衆の一人である。別の点で、彼は独特の自我を持っているようである。内なる存在は人間的な状況に優る」(*Quest for Salvation In Saul Bellow's Novels*

42）ベローが如何に“内なる存在”である自我を重視していたかは、ぎりぎりのところでオルビーと闘う犠牲者たる主人公を見ればよく理解できるであろう。優柔不断で、父親の寄生虫であり、家庭に対する責任感の欠如したウィイルヘルムは例外的な主人公であろう。「ウィルヘルムは喜劇的なほど時宜を得ないけれども、彼の商品市場での投資は、彼の教養が正当化され、拍手さえされる行動である」（*Julia Eichelberger Prophets of Recognition* 103）これほど痛烈な社会批判をしている作品は、他には見あたらない。それ故にベローは、ウィルヘルムを除いて、社会と簡単に妥協をしない主人公を描くのを作家の使命と考えているようなところがあるし、それが彼の文学の特徴ともなっている。

彼は『犠牲者』で徹底的にワスプをユダヤ人の立場からこきおろしている。ユダヤ人は特に上昇志向が強く、ワスプと衝突するのは避けがたいことであった。「ユダヤ人は、彼らの経済的地位を前進させ、彼らの子供たちをホワイトカラーの階級に押し進めるのに相当に成功したけれども、彼らは経済的不況の期間にしばしば伴った反ユダヤ人主義的ないやがらせに対して傷ついたように感じ続けた」（*New York Jews and the Great Depression* 14）この反ユダヤ人主義はヨーロッパというよりもナチの思想と対立することになった。「20世紀の中頃ユダヤ教の倫理的な価値はヒットラーと彼のナチの哲学によって厳しく攻撃された。」（Saul Bellow 10）このナチの独特な思想がユダヤ人の大虐殺につながったのである。ベローはサムラー氏の惑星でナチの暴挙を鋭く糾弾している。不幸なことに彼らにはアメリカでワスプ以外に黒人という敵が待ち受けていた。

彼らと黒人の対立は、マラマッドの『借家人』で素晴らしいタッチで描かれている。一見黒人を理解しようという立場に立って彼らの行動を描いており、最終的に作者は主人公に精神的な世界を理解させるように終わらせているが、これほどコミックなタッチでワスプを非難しているのも珍しいのである、言い換えるならば、ユダヤ系アメリカ人でなければ書けない小説であろう。『雨の王ヘンダーソン』に対するベローの主眼は、物質主義に踊らされるよりも、精神主義的な生き方をすることをアメリカ人に求めた壮大なコミック小説である点にあり、またコミックであるからこそ書けたのであろう。『宙ぶらりんの男』と、『犠牲者』はベロー本人が言っているようにあまりにも悲し過ぎるということで、彼は『オーギーマーチの冒険』を書いたということである。『犠牲者』は確かに暗いことは事実であるが、作者自身もいつまでもユダヤ系アメリカ人ということを特徴として利用することは作品の幅が狭くなりすぎて、方向転換をせざるを得ない時期にきていたのである。ということは、彼がユダヤ系アメリカ人の問題を一応卒業したということであろう。作者自身がアメリカ人に少しなり切ったのかも知れない。ベローは、「作家というものは自らの生活を作る事が出来るし、作るべきである」（*Converastion with Saul Bellow* 9）という考えを持っていた。ヘンダーソンはベニスに気楽に旅をしたアッシェンバッハのようにはいかなかった。ベローは作品を書き上げた11年後になぜかアフリカを訪ねている。何故にアフリカに行かなきゃいけないのかと言っていたベローにも、何か変化が起きたのである。『オーギーマーチの冒険』は都会の少年の逞しく生き、逞しく成長して行く精神的な軌跡を描いた小説である。

彼は対談集の中で他の作家によって作られた旧来の伝統に呪縛された形式ではなく、彼独自の小説を書きたいという意欲を対談者と語っている。これは作家なら当然のことであろう。しかしその対談集で、彼が文化を認めないという発言を奇妙にもしているのはかな

り気がかりである。作品の中の登場人物はある文化規範の中で無意識の内に生活しているのであるから、作者はそれを認めないと作品自体そのものの価値が認められないことになる。「作家の幸福は、感情になりきり得る思想であり、思想になりきり得る感情である。」(『ベニスに死す』トオマス・マン.93) 対談集でベローは解しかねるような言葉を出している。「私はそこにいるアメリカ人の百万長者をほとんど積極的に歓呼していない、私が？」(*Conversation with Saul Bellow* 17) ベローはヘンダーソンを温かい目で描いたのではないのだろう。『この日を掴め』が“資本主義賞賛の聖歌”で殆どないのと同様に、ベローはやはり『雨の王ヘンダーソン』でもアメリカのあるいはアメリカ人の資本主義に毒された社会の批判を行っており、結果的にはワスプ中心の社会に住む彼ら自身も悩まなければならないし、悩むべきだと密かに考えているのであるかも知れない。ベローはこの作品を書く際にこのような幸福を味わっていなかったことになる。アメリカでは、愛と死をテーマにした小説はゼロだと言われている。『ボバリー夫人』、『アンナ・カレーニナ』のような姦通小説が生まれる素地はアメリカにはないと言われている。彼の最も重要な課題は、如何に人間にとって精神的な自由が大切かを作品の中で論じることであった。

アメリカの小説的想像力の誕生を主宰するのは、リップ・ヴァン・ウィンクルという人物だ。アメリカ根生いの伝説の最初の成功例が、遊びの気分は入っているにせよ、夢見る男の女からの遁走を鮮かに作品化していたというのは、いかにもふさわしい話で、この主人公は、家庭と町の退屈な義務から逃れて、山中へ、時間の外へ、よき相棒たちと魔法のビール樽の方へ向かうのであった。以来、アメリカ小説の典型的な男性主人公といえば、悩みつつ遁走する男、森の中へ、海へ、また川を下ったり、戦闘へととびこんだりして、ともかく「文明」を避けようとする－つまりは性と結婚と市民生活への失墜をともなわずにすまない男と女の対決の回避に他ならない。(*アメリカ小説における愛と死* 26)

レスリー・フィードラーに言わせれば、アメリカ文学は女からの逃避型の小説しかかけないという誠にある意味では英断である。本来の文学のあるべき姿は、やはり男と女の物語であるが、時代の変遷に伴って小説のジャンルも豊富になり、心理小説、恐怖小説、未来小説等と、これからどのような名称の小説が生まれるか分からないのである。「小説がとりわけ栄えたのは、フランスとドイツ、とイギリスであった。ここはヨーロッパの宗教的行進の途上で、女性に導かれたカトリシズムと、父性中心のプロテスタンティズムが出会う場所であった」(*アメリカ小説における愛と死* 59) 大真面目に神の国を建設しようとした清教徒たちの根底にあったピューリタニズもさしもの権勢が落ちてくると、彼らの野望も消え去ると同時に、アメリカは第二のホーソンを必要としなくなった。

“闇の奥”的な小説は、アメリカでもエドガー・アラン・ポーが元祖であろう。『ゴードン・ピムの物語』は彼の最高傑作であろう。ピムの眼前に現れた経帷子の格好をした白いものは一体なにであったろうか？それは彼の将来の死の象徴であろう。それはポーが夢見た死の不安なのであろう。メルヴィルも同様にその“闇の奥”への旅立ちをした。彼の一連の旅は、『マーディー』、『タディ』に始まり、『白鯨』でその長い旅を閉じたのであったが、明らかに『マーディー』はあの最後の結末を見れば意味不承であり、失敗作であろうし、自ら邪悪な本と呼んだ『白鯨』は神への冒涜であったのであろうか。アメリカ版ゴチック小説は、ポー、メルヴィル、ホーソンが代表であろうが、メルヴィルは近親相姦を

描いた『ピエール』を悪から目覚めたピエールで終わらせている。ベローは、無意識の内にアメリカの伝統的なあの“闇の奥”へと入り込み、良きアメリカ人として内面的な生活を重視するという変身を遂げているのである。ベローは、アフリカ大陸に精神的な安定を求めて行き、しかし原住民の生活を逆に脅かし、逃亡寸前に王の敵である人物から王のシンボルであり、アフリカのシンボルでもあるライオンを奪い去ってアメリカに帰るのであるが、このライオンの子供は読者の前に不思議にも突如現れて、彼らを惑わせるのである。これはあの『マーディー』においてメルヴィルが犯したような間違いを同じようにベローも行っているということである。この作品は大作であるけれども、質的には彼の代表的な短編にはかなわないであろう。文学史的には、ポー、クーパー等はロマンチックであるが、ベローは基本的には写実主義である。彼の手法は写実主義的であり、現代社会を解剖し、そして彼は世界の資本主義の最先端を行くアメリカが巨大な力を持ち、世界に対してその経済力を背景にして力の政治を展開し、世界の警察官を誇示してきたその行動を『雨の王ヘンダーソン』で皮肉にこき下ろしているのである。

作者がアメリカの現代の作家と違って政治により大きな関心を持つ理由のひとつは、1917年にロシアに政変が起き、作者の両親がカナダのモントリオールに移住したことであろう。勿論作者が直接に経験したものではないが、この事件が彼に間接的に大きな影響を与えているのである。もう一つの理由として彼がユダヤ系アメリカ人であるということである。ちなみに無政府主義者にはユダヤ人出身が多いという事実も見逃してはいけないであろう。彼はいろいろな作品の中で冷戦、ロシア、スペイン戦争、10月革命、資本主義の当然の結果としての大量生産、大量消費等をことあるごとに書いている。彼が第二次世界大戦を帝国主義の戦争と呼んでいるのは興味深いところである。ユダヤ人の歴史を考えれば、世界の政治の動向に敏感なのは当然なことである。まさしく大恐慌はユダヤ人を直撃した。

彼は『犠牲者』でユダヤ人に対する反ユダヤ人主義と大恐慌時代の就職の困難さを率直に表現した。アメリカでのユダヤ人の互助組織が作られ、強化されたのは大恐慌の時代であった。「資本主義がアメリカへの支配を失ったように見えた」(*It All Adds Up* 102) このパニックによって資本主義も完璧なものでないことが実証されたということだけでも意義深いのである。この作品はアメリカの資本主義への間接的な批判とユダヤ系アメリカ人のアメリカ社会への抗議の書となっている。『オーギー・マーチの冒険』と同様に『雨の王ヘンダーソン』にも彼独特のジョークとか言葉遊びが多い。ベローは自らリベラルであると言っているし、1970年代から20年の間に自由主義が消え去ってしまっていることを苦々しく感じている。彼にとってはアメリカにおいて政治的な健全さが重要であった。「人々は一般的にこの国で疑問を議論する習慣を失ってしまった。テレビは彼らのためにそれを行っているが、彼らは意見を持っているがしかしそういった意見は思考あるいは議論からとられているのではない」(*Conversation With SAUL BELLOW* 294) この作品が出版されたのは1957年であるから、年代的には、アメリカがフランスに代わってベトナム戦争に参戦していた時である。彼は対談集の中で小説のヒントを日常購読している新聞からとっているという話をしているが、そうすると、彼はアメリカが東南アジアの小さな国である南ベトナムを支援するために多大な経済的、人的損失を覚悟で参戦を決断した暴挙と、アメリカ国内での経済的繁栄の煽りを受けての大量消費を彼一流のジョークで皮肉っているのであ

る。「ドストエフスキーが、『カラマーゾフの兄弟』で警告した最大の危険は、世界的な密集地であった。D. H. ローレンスは、我々の工業都市の平凡な人々は古代都市のあの無数の奴隷のようであると信じた」(*It All Adds Up* 60) ベローが影響を受けたのはシェークスピアを始めとして、ジェームズ・ジョイス、ヘンリー・ジェームス、トルストイ、ドストエフスキー、コンラッド、ヘミングウェイ、フォークナー、バルザック、チェーホフ等などであるが、何と言ってもドストエフスキーから文学的な影響を一番受けているのである。

ドストエフスキーが時代を超越した人間そのものを描いているからであろう。彼とドストエフスキーの接点は、挙げれば結構あるのである。第一に神であろう。神と言っても、彼はユダヤ教であり、一方はロシヤ正教であったが、「しかしドストエフスキーは自分自身を最も実践的なキリスト教徒だと考えていた。」(*It All Adds Up* 45) ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』で神の存在の有無を問うという重要な問題を提起している。第二にフランス文学、思想、哲学はドストエフスキー、ベローにとっては避けて通れない共通の関心の的である、しかし彼はドストエフスキーに対して許し難いものをもっていた。それは彼の反ユダヤ主義であった。ベローは無数の有名な作家について言及しているが、しかし最も文学的な影響を受けた作家は、誰であるかを語っていないが、恐らく『封印された宝』を読む限り、ベローもまたフローベルから強い影響を受けたのであろう。

『闇の奥』でジョセフ・コンラッドは列強のアフリカ大陸の侵略をクルツと言う人物に象徴させている。彼は象牙を経済的な富として描き、そしてクルツに現地人を酷使させ、富の象徴たる象牙を集めさせているが、最後にクルツは恐怖だという言葉を発して事切れてしまう。視点を変えれば『雨の王ヘンダーソン』も、他の民族の幸福を考えることなく、アメリカの国益優先の政治を批判しているということも出来るであろう。ベローは、ベトナム戦争について非常に注目すべきことを発言している。彼は当時のジョンソン大統領から芸術分野のリーダーの一人としてホワイトハウスに招待された。彼は愚かにもそれを受けたと悔やんでいるが、「私は『タイムズ』に手紙でベトナム（戦争）に対する反対を表明しようと思ったが、しかし私は大統領の職というものへの私の尊敬を表そうとしてその大集会にそこで出席することにした」(*It All Adds Up* 110) ベローがこの作品を出版したのが1993年だから当時を回想して書いたのであり、彼は当時のアメリカの国際政治のあり方そのものに反対していたのである。まだその時代には、資本主義、共産主義の対立が厳しく、アメリカは資本主義の番人であり、中国が積極的に支援する北ベトナムに南ベトナムが敗北をすることは断じて容認できないという事情があった。

ベローは良識あるアメリカ人として、また作家として自己の考え方をこの作品に強く投影しているのである。彼は徹頭徹尾リアリズムを守る作家である。ベローが、アメリカの現代社会あるいは資本主義に振り回されているワスプを非難するなら、彼はどうしてヘンダーソンと前妻であるフランシスを離婚させたのであろうか？彼女は西欧の伝統ある知識に裏付けされた女性であり、フランスのインテリと文通をし、哲学に関心のある読書家であった。ベローはどうしてもフランシスを離婚させる必要があったのである。これもベロー一流のジョークであろう。彼はフランス文化なるものを毛嫌いしているし、アメリカがとくにフランスを始めとしてヨーロッパの知識人からベトナム参戦に対して痛烈な非難、罵倒を受けていたことと関係しているのであろう。彼は相当にフランス、フランス文学を意識していることは事実である。対談集でも、彼は「フランス人はいつも我々の文学に引

きずられている。一時期彼らはフェニモア・クーパー、バッファロー・ビルに夢中になった」(*Conversation with Saul bellow,p.44*) 彼はあくまでフランス文学を、いやフランス文化そのものを認めることを拒否しているのである。彼はだからヘンダーソンの前妻にフランシスという名前をつけたのであろう。むしろ前妻はリリーのような陽気な直情径行型のタイプが良かったのではなかろうか？これは筆者のあくまでも想像に過ぎないのであるが、ベローの作り上げた主人公は第二次世界大戦で負傷し、「名誉戦傷賞」を貰い、その後帰国して養豚業をやっていた。彼は大柄で、陽気で、力自慢という典型的なアメリカ人でその職業に邁進し、経済的にも成功したのであるが、彼の心の底には名状し難い「シタイ」、「シタイ」という欲望がうごめいていた。

この「したい」という言葉は、当然何か行動をしたいという意味であろう。アメリカは世界最強国であり、アメリカ人は他国を無視した暴力的な干渉すら、正義を全面に出せば可能となったのである。これは現在の国際政治におけるアメリカの発言、行動をよく見れば理解出来るであろう。アメリカ人は経済的な繁栄の恩恵を充分に謳歌していて、彼らは物質的な欲望を金銭と引き替えに満足させていた。彼らはそれだけが全てではないということを理解し始めた。精神的な充足ならば、哲学的、思想的な書物の読書が最適であるはずだが、ヘンダーソンーはそれはおろか読書とは無縁の存在であった。彼はむしろ哲学そのものを軽蔑していたからこそ、最初の妻と離婚したのである。作者はここでもフランス嫌いを出している。

彼は何回となく自問自答してみたものの、その答えはリリーを捨てるということでもなければ、くだらない女性を求めているというものでもなく、答えという答えは全て的はずれであった。「ああ、お願いだから、言ってくれ、何がしたいのか教えてくれ」そしてまた「ああ、よしよし、そのうちにな。ばかな、少し待ってろと」(*The Rain King Henderson 36*) この言葉はいつも真夜中の三時にはじまり、ようやく明け方になって止むという深刻さであった。主人公の考えでは、「アメリカは大きいぞ、だれもが働き、物を作り、堀り、ブルドーザーやトラックを動かし、何かを積む等々をやっている。お前さんひとりが、苦しんでいるわけじゃない。みんなが力を合わせがんばっているんだ。そう思ってもみた。考えつくかぎりの療法はやってみた。もちろん、狂気の時代においては、狂気におかされまいと望むこと自体が、一種の狂気に違いない。だが、正気の追求もまた、一種の狂気ではないか」(*Henderson.The Rain King 37*)　主人公はアメリカが世界一の経済大国であることを自認し、アメリカ人全体が富の獲得に夢中になっていたのであるが、彼はそういったアメリカ人を軽蔑し、自己嫌悪に陥っていた。それ故に彼は心の中に仮のアフリカを作りあげ、一時的な逃避をそこにする羽目になってしまった。彼は精神的に緊急避難をする　ー自我の喪失を恐れてのことであった。

彼は自己の破滅の時がきたと悟った。彼はイテロに自分を殺すように言ったが、彼が聞いたのはムタルバの嘆き悲しむ声であった。彼はムタルバが喚いている意味がわからず、それをロミラユに聞いてみると、「さようなら永久に、と言っているよ」(*Henderson The Rain King 155*) イテロと同じ学校に留学していたダフーが率いるワリリ部族のいる方向に、彼らは歩き始めた。彼らは10日間歩き続けたところで武装した一団に捕まってしまった。彼らは小屋に閉じこめられ武装したグループに監視されることになった。彼らのいる小屋には黒人の死体が放置されていたので彼がその死体を背負って月明かりを頼りに崖に上

り、その死体を崖下目指して放りだした。その後直ぐに彼らは中庭に連行され詰問官から、いろいろと質問され、そしてロミラユの通訳した所によると、王様が明日彼に合う予定だと言った。

いよいよ王様とヘンダーソンの会見が始まった。王様の話によると、どんなに彼が民衆に慕われていようとも、彼の側にいる女性が彼の体力の衰えを大僧正に報告すると、彼はその大僧正と他の僧侶によってジャングルに運び出され、絞殺されるということであった。

いや、まさにこのとうり。ワリリ族の王たるものの将来を、包み隠さずお話ししているのです。私の死骸に、うじ虫が生ずるまでは、僧正がかたわらについていてくれる。そして、絹でくるんで、また町へ運んでくる。これを民衆に見せて、これこそ王の魂、つまり私の魂なりと宣言する。それから大僧正は再びジャングルにはいり、一定の期間がたつと、ライオンの子をつれて町にもどってきて、うじ虫が、今やライオンに転身した、と説明する。それからまたある期間をおいて、こんどはライオンが次代の王に転身したと宣言する。この人物が、つまり私の後継者です。(*Henderson The Rain King* 219)

彼らの会話中にもライオンの咆哮が聞こえていた。王様は、彼にアフリカに来た目的はなに何かと尋ねられて、彼は放浪者のようなものだと答えている。最初からヘンダーソンは定住いや移住する気持ちも無く、夢の中の放浪者であった。

彼らの会見の日の午後スタジアムで儀式が行われた。王様と大女とがそれぞれ頭蓋骨をもって投げ合い、神官による牛の刺殺、土俗的な踊り、寸劇、力自慢の男たちによる彫像の移動等が行われたが、しかし彼らがまったくかなわなかった彫像、ハマット（山の神の意味)、とマンマー（雲の神の意味）が残ってしまっていた。チュロンボという男はいつもハマットを移動させることは出来るのだが、マンマーには失敗していた。彼は今回も挑戦してみたが、失敗し、大群衆の嘲笑を浴びてしまった。ヘンダーソンはマンマーに挑戦することを王様に申し出た。彼は見事に成功した。「ヘンダーソンさん。お知らせがあるのです。マンマーを動かした人は、当然、ワリリ族の雨の王の地位を占めるのです。あなたはサンゴーになりました。ヘンダーソンさん、みんなが集まっているのはそのためですよ」(*Henderso The Rain King* 274) 彼は正式にその儀式によって雨の王サンゴーにつくと、スタジアムを離れたところで彼は蔓と木の葉という雨の王の装束を無理に付けさせられた。

雨雲がだんだんとその濃さを強めるに従って、むっとするような胸苦しい重い風が吹き出した。彼はその衣装でそこに戻り、彼の周囲で女性たちが踊り、跳びはね、わめきといった形で雨乞いの儀式を始めたのであった。その直後に、大洪水を思い起こすような雨が降り出し、王様は彼に「ヘンダーソンさん、大仕事をやり遂げてくれましたね、このお礼は必ずいたしますよ」(*The Rain King Henderson 284*)　王様は王宮の下から聞こえてきたライオンの声の持ち主であるアッティーを彼にみせた。そのライオンは忠実に王様の命令に従った。王様はライオンと親しむ訓練を彼に施すことになった。この訓練とはライオンを真似、ライオンを演じることであった。彼はまず最初に取る姿勢は四つんばいになってライオンの姿勢をすることであった。

でも、以前の凝り固まった態度をおやめになた点には心からおめでとうを言いたいのです。そこで、もうほんの少し柔軟さをふやしていただけませんか。まだ一つの鋳型におさまったみたいです。横隔膜が支

配的ですよ。もっとほかの部分も動かせませんか？その重苦しい不承不承の態度を少しでも減らしてください。なぜそんなに悲しげで、重々しいのです？ほら、もうライオンなんですよ。ライオンとして、周囲を思い描いてごらんなさい。空、太陽、そしてジャングルの獣たち。彼らがみんなとつながっているんです。ぶよまであなたの身内ですよ。空こそあなたの思想、葉っぱこそあなたの支え、ほかには何もいらぬのです。星たちの言葉は、終夜さえぎるものなく、語りつづけます。ヘンダーソンさん、私の話、聞いているんですか？これまでに多量のアルコールを消費されましたかな？お顔からすると、とくに鼻を見るとそうらしい。いや、何も当てこすってるわけじゃありません。いくらも生まれ変われますよ。いや、丸ごととはゆきませんが、ずいぶんと変われるんです。(*Henderson The Rain King* 374—375)

この第一回目の訓練で、王様もほめ言葉を彼に与えるほどのライオンに成りきっていたのであった。王様の持論である、個人の魂のあり方が、率直に肉体に現れる。数回の訓練を済まし、いよいよ王様とジャングルへライオン狩り同行することになった。その間にロミラユは彼のリリー宛の手紙を携えて別れを告げていた。

ライオンは勢子に追われて小屋の方にやってきた、それと同時に門がかけられ、いよいよ生け捕り作戦が始まった。ホポという簡単に言うならば三角形の形をしていてその入り口のところに仕掛けがしてありそこに追い込むのである。どうやらお目当てのライオンはその中にいるらしかった。その上には藁小屋があり、そこへと蔦の縄梯子かけられていて、王様と彼が小屋へとよじ登った。王様がそこから石の重石のついた網で出来た籠を投げそしてライオンを生け捕りにするのである。運悪く王様はライオンの重みと、自己の体重によってロープを支えていた滑車が壊れ、下に落ち、彼は暴れていたライオンの爪により重傷を負った。そのライオンはグミロではないことが判明したので、その場で射殺された。王様は王宮に戻る途中出血のために亡くなった。

「サンゴーが、私のあとも継ぐんです」(*The Rain King Henderson 444*) という王様の意志によってヘンダーソンは、王位に就くことになった。

とにかく、もうここには残らんよ。王様になる機会はなんてまたとはないだろうが、ね」そして亡くなったばかりの、あの男を思い、無の中へ、夜の闇の中へと、永久に姿を消した王を思い浮かべると、彼がわざわざぼくを跡継ぎに選んだという気がしてきた。故郷に背を向け、無意味な生活を捨てて出てきたのは、ぼく自身の責任ではないか。王は、ただ、ぼくを王者たるにふさわしい器と認め、新しく再出発する機会を提供してくれただけだ。そこで、隣の部屋の王に、ぼくは壁越しに感謝を送った。が、ロミラユに向かっては、「いや、ここに残って、王の後を継ごうとすれば、悲しみがたえがたいよ。もう家へ帰らなくちゃならん。(*Henderson p The Rain King*4 49)

彼はダフーの敵であるビュナムがもっていたライオンの子を奪い去り、それをアメリカに連れて帰ることにした。それは王様の象徴であり、ダフーは平和主義者であり、アメリカは常に世界の警察官を自認しており、どこかに紛争があるとかなり強引に戦争に介入するけれども、その結果は成功かというとむしろ失敗の形が強く、作者は暗にそれを揶揄しているところがある。

ベローは『雨の王ヘンダーソン』で間接的にアメリカの政治的な行動をパロディー風に書いているが、しかし『モズビーの思い出』では政治理論について述べている。「アメリ

カにおける保守主義の弱さ、保守的な代案の無さ、行き渡っているリベラリズムに対する無抵抗」(*Mosby's Memories* 175) 作者はフランスの文化的伝統から相当な恩恵を受けていることは事実である。「ベローの作品はどんどんと時代を越えた、そして時代に限定された間の明白な緊張を提供している」(*SAUL BELLOW IN THE 1980* 12) のであるが、しかしこのような特徴は彼に限った訳でもなく、ドストエフスキーはそのような最高峰に位置しているのである。メルヴィルは大海に潜む白鯨を追い求めたのであるが、ベローはアフリカで小さなライオンを見つけたのであった。前述したようにこの作品は彼の想像上の旅であり、彼はアメリカにはない貴重な精神的な象徴としてのライオンを持ち帰ったのであった。「における精神的な再生と想像力は、この小説の中で特別にロマンチックな言葉で表現されており、ブレーク、シェリー、コールリッジ、ワーズワースの作品への重要な暗喩と引用が見られる」(*SAUL BELLOW IN THE 1980* 69) ということであるが、作者がこういったイギリスを代表するロマンチシズムの作家を読み、深く理解していることは想像に難くないが、彼が意識的に彼らを引用しているとは考えることが出来ない。彼の読書体験を大雑把に知るには『サムラー氏の惑星』が最適であろう。彼が専ら好んで読んだのは俗にいう社会派小説であろう。彼は一時期ジョセフ・コンラッドを愛読した。「ある学期のとき金融と銀行のコースを勿論登録し、そしてジョセフ・コンラッドの小説の読書に集中した。私はこれを後悔する理由は何も無い。多分コンラッドは私に訴えたのであった、というのも彼はアメリカ人のようであり、フランス語を話し、途方もない力と美しさで英文を書き、エキゾチックな海を航海した根なし草のポーランド人であったからだ」(*It All Adds Up* 88) 彼が最も好きな作家はジョセフ・コンラッドであろう。彼はポーランド出身の船乗りであり、海洋小説の第一人者であり、ユダヤ人ではないが、亡国の運命を背負った環境をユダヤ人の苦しみとオーバーラップしていたのであろう。彼が小説というものをどのように考えていたかは次の文に明確に述べられている。

「小説というの、はごく僅かの真実と、我々が人生と呼んでいる大部分を作りあげている偽物の部分との間でバランスがとられているものである。」ベローがコンラッドを尊敬している証拠が、『小説についての講義』の最後の文にある。「コンラッドが言っていることは正しい：芸術は根本的で、永続的、必然的なものである人生の事実の中と同じように、宇宙の中に、いろいろな中で発見することである」(*It All Adds Up* 97)　アメリカの強引なベトナム戦争への介入は彼の主義主張からすれば許し難い行動であったので、彼はこの小説の中で、ヘンダーソンという力自慢のアメリカ人を作り上げたのである。当然彼は強国としての力を振り回すアメリカを象徴しているのである。この作品の中で、一番ユーモア溢れる、と同時にもの悲しい光景は、ヘンダーソンがマグナム銃の弾丸から取った火薬がどれほどの威力があるのか知らずに、適当に懐中電灯の筒に詰めて、アーニュイ族の大切な牛の水源地の蛙を全滅させようとして、池そのものを爆破してしまい、這々の体で逃げ出すところである。このあたりはあのベトナム戦争の最後のアメリカ軍の行動に似てはいないだろうか。作者はアメリカ政府に対して痛烈無比な批判をしているのであろう。この作品の最大の象徴であるライオンは、アフリカ、それに自然そのものを表しているのである。ダフー王は、ヘンダーソンの人格を変えるにはライオン療法が最適であるということで、彼はそれを受けることに同意した。

いろいろ私に話してくれました。率直な方ですね。これがほかの人とは違う。ここのところが、たまらなくいい点なんです。あなたは、高潔なる人格の基本をお持ちだ。崇高になれる人なんです。なるほど、ある部分が、ずっと底に埋もれて、死んだも同然になってるかもしれないが。果たして復活の可能性はないでしょうか。そこに、変化ということが、働きうるのです。(*Henda-son The Rain King 366*)

ダフー王は、彼の心を見抜いていた。「おお、高潔なる行動、そうです。高潔なる行動なくしては、悲惨以外の何物もありません。あなたが、アメリカの家庭をあとに出ていらっしゃたのが、高潔な行動の欠如のためであることは、わかっていたのです」(*Henderson The Rain King* 372) ヘンダーソンはサンチョ・タイプの猪突猛進型であり、彼はダフー王の言葉を信じてライオン真似の訓練に励み、彼のライオンの咆哮と姿勢の物真似は、ダフーも驚くほど進歩の跡を示した。ここのダフー王の発言は、当然作者の考えを言わせているのである。言い換えるならばダフーは作者の分身であり、ヘンダーソンは正しい生き方ができなくなっているアメリカ人を象徴しているのであろう。このヘンダーソンの変身は、古今東西良く小説に見られる手法であり、ゲーテのファーストはマルガリーテによって変身させられており、メルヴィルはピエールを変身させているが、彼ら主人公は悪霊にとりつかれていたのであるが、それを転機として善なる人間に復活している。作者は、完全にアメリカ人は人生の志向が現在のところ間違ってはいるが、しかし彼らは変身が可能な状態にあり、今まさに彼らがその行動を起こすように促しているのであろう。彼は人間の住む社会そのものに関心がありドス・パソス、ジャック・ロンドン、等の社会派小説を読み漁った。

我々が見た通り、ヘンダーソンは、最後にtrafeであることが判明するあの特別な野獣を訓練させる方向へと進むのである。その野獣の絵は現実のドラマ以上に回想的な感情としてかなり成功している。ヘンダーソンの愛についての最後の断定については、中年の、円熟したものがあるというのもそれはあまりにも多くのものを要求しないということに気づいたかもしれない。アフリカがヘンダーソンの目を覚まさせた、その結果愛の可能性は、当然一杯あるように見える。ある意味で、それは彼を清潔にさせ、彼を一新させ、彼に経験を通してあの第二の、より高い無邪気さを与え、そのために大人と子供についての想像を判断すうことは適当に補いあい、それが人間と野獣の想像にとって変わるように。(*Quese for Salvation in Saul Bellow's Novels* 125)

この白いライオンを問題にする前に、彼が旅先としてどうしてアフリカを選んだのかが重要となってくるのである。彼の行き先はブラジル、あるいは中国ではいけないのだろうか。少なくともアフリカは他の国と比較するとより素朴で、より自然が多く、より文明の被害に会っていないからであろうか。彼が一時的にしろアメリカを離れたということは文明からの逃避であったに違いない。文明が全て人間にとってマイナス材料になるかというとそうではないであろう。日常生活でいうならば文明が進めば人間は快適な生活を送ることが出来る。彼はそのようなことを充分に理解してアフリカの原野を目指したのであった。もう一つ問題となるのは、彼が一度もアフリカを訪れていないということである。彼が描いたアフリカは彼自身のアフリカなのである。このアフリカは架空のアフリカであり、彼は自分が想像したアフリカへと旅だったことになる。もしアフリカを良く知っていたなら

ば、たとえ原住民に依頼されたと言へども、彼らの家畜の貴重な水源地で手製のダイナマイトをそこに棲息する蛙を殺すために使用し、そのダム自体を破壊するという暴挙はしなかった筈である。彼がこれを意識的に書いたとしたならば、それはアメリカの独善性を皮肉ったのである。郷にいれば郷に従えという言葉の意味が分からないアメリカ人はこれまで海外でさまざまな行動を起こしていて、それが結果的に貴重な教訓になっているかというと、恐らく現在でも何も変わっていないであろう。そうすると、彼の描いたアフリカはアメリカと対照的な自然の大地であり、彼は原始の国へと仮想的な体験旅行したのである。ここに登場するダフーは、アフリカの知者であり、アフリカの指導者であり、アフリカにおけるヘンダーソンの家庭教師であった。ダフーから課せられたものはヘンダーソンと野生のライオンが対峙することであった。

ベローは作品を書き直すことで有名であり、例えば初版と第三版ではいろいろなところが書き直されていて驚くほどばかりである。『ハーツオッグ』で三年の歳月をかけたと言われている。トランクに一杯原稿を持っていると、彼は対談者に語っている。そうすると『雨の王ヘンダーソン』は完成するのにハーツオッグ以上の時間を懸けているであろう。彼に言わせると『ハーツオッグ』と『雨の王ヘンダーソン』を書くために『オーギマーチの冒険』で創造したスタイルを大切にしたということである。彼は読者層を如何に意識していたかが、次の言葉の中に表現されている。「私は受け取った手紙からその本が共通の苦境を描いているということを知った。『ハーツオッグ』はユダヤ系のアメリカ人、離婚している人々、彼らと話しをしている人々、大学の卒業生、廉価本の読者、独学者、もう少し長生きしたいと望んでいる人々等に訴えた」(*Conversation with Saul Bellow* 66) 彼の小説は“現代的な写実主義”であり、主人公は極平凡な人間であり、ベローは『雨の王ヘンダーソン』が出版される直前に『ニュヨークタイムズ』のブックレビューに“世界の慧眼の読者たちよ、目を覚ましたまえ”という宣伝文を掲載した。この言葉から、彼が如何にその作品に自信を持っていたかということが分かる。しかしベストセラーのリストからそれは三週間で脱落したということである。エリザベス・ハードウイックは、『パルチザンレヴィユー』でヘンダーソンのアフリカはアフリカを茶化していると抗議したということである。「ベローの殆ど自叙伝的でない創造物であるヘンダーソンは、彼が最も自己と同一視した人間である」(*Bellow A Biography* 275) ヘンダーソンは他の作品の人物等と違って行動的であり、明るく、強靱な体力を持つ典型的なアメリカ人である。確かにヘンダーソンはアフリカをどこまでも可笑しくさせているが、『闇の奥』をかなり意識して書き、ヘンダーソンはアフリカを縦横無尽に踏破するほど気力が充実していた。「表面的には『雨の王ヘンダーソン』はベローのより以前の小説の偉大なる書物的な雰囲気からの離脱である」(*Bellow A Biography* 271) 知識の人ではなく行動する人としてベローから使命を与えられたヘンダーソンは現代アメリカの先兵としてアフリカに乗り込み、雨の王としての称号を与えられ、最後にダフー王の遺言によって王となる予定であったが、アフリカに残り苦しみながら王を勤める事は出来ないとロミラユに言い残してアフリカから逃げ出す.ヘンダーソンは、アフリカからのアメリカの撤退を象徴しているのであろう。ヘンダーソンはアフリカの現状を理解して,アフリカはアフリカ人の手でという解決策を示したのであった。アメリカ人になり切る努力をし、そして成りきったジョウゼフが改名してヘンダーソンになったのであろうか？もの静かなジョウゼフ、レヴェンサールは自分の考えに正直であり、

それに従って行動した善意溢れる人物である。そのような意味ではヘンダーソンも彼らと同じである。『オーギー・マーチの冒険』はシカゴの下町生まれのオーギー・マーチの精神史であり、ヘンダーソンとは違う生き方をするのである。ベローは物質主義を嫌い、精神的、内面的な生活を主流とした小説がやはり多いし、それが多いということは彼が現代文明に流されず、頑なに自己の信条に従って生きるということを尊重しようとすることである。

ベローは、『フンボルトの贈物』で、善、あるいは善行ににについて“私”に語らせている。“私”の心の中にあるものは金銭ではなく、善行であるが、それを必死に探っていたのである。この善行については“私”にずっと以前から有った問題であり、ベローは他の作品でも執拗に取り上げている。だけれどもこれが人生という草深い中で隠れてしまっていると嘆いている。“私”はマヤ族の色彩豊かなヴェールと永遠という白い光を汚している極彩色のドームに気づいていたが、それらに夢中になっていた。資本主義についてところどころで言及している。「彼は色彩をほどこされたヴェールと大金の間の矛盾をただ強調した。私はそのようなお金を儲けたように、金自身も金を作った。資本主義はそれ自身の暗い喜劇的な理由で金を作った。その言葉が金を作った」(*Humboldt's Gift* 3) 豊かさが豊かさを生むと言われているように、資本主義によって人間は拝金主義になったが、フンボルトは時代に対応できなくなり、その時代を象徴する金銭を軽蔑し、そして彼は資本主義の悪を理解していた。「彼はこのアメリカの世界（私自身もまたそうであった）から離れて自らを考えようとした」(*Humboldt's Gift* 6) 彼は資本主義の時代に反抗し、それに巻き込まれないような努力をした。それに反して“私”はその時代に適応し、演劇で財を築き、それに映画の版権でも稼いだのである。例外なく百万長者になった。フンボルトはサムラーと同じように猛烈な読書家で、そして詩人であった。

フンボルトの成功は、約十年間続いた。40年代の後半彼は人気がなくなり始めた。50年代の前半私自身が有名になった。私は巨万の富さへ築いた。オー、金、お金だ！フンボルトは金のことで私の悪口を言った。彼は酷く落胆していて話しさへきつく、そして精神病院に入ってはいなかった人生の最後の時、彼は私と同じような百万長者について厳しく非難しながらニューヨークをうろついていた。(*Humboldt's Gift* 2)

そのフンボルトさえも今では大金を懐に入れていた。彼はロシア人のバレリーナと結婚して、金がついて来たのであった。なんと皮肉な時代であろうか。金持ちの“私”を嘲笑していたフンボルトが“私”と同じ境遇になっていた。これはベロー独特の皮肉なユーモアとして取る以外ないであろう。アフリカから白いライオンを連れてアメリカに戻ったヘンダーソンハはまたしても、資本主義の誘惑に負けてしまったフンボルトに変身したのであろうか？「昨日私は、人間の記録された歴史としての五千年の中でそのように多くの、そのように豊かなことはなかったという豊かさの憂鬱の記事を『ウオールストリート・ジャーナル』で読んだ。貧しさによって形成された精神は歪められている。心は、このような変化についていくことが出来ない。時々それが受け入れるのを拒否するのである」(*Humboldt's Gift* 5) “私”はピューリツアー賞受賞によって、富の蓄積に成功したのであったが、やはり“私”もアメリカ人の精神の変化に慨嘆しているのであろうか。≪破滅的な

混乱≫が彼も、そして“私”をも7年前に時代遅れの人間にしてしまっていた。彼らはある意味では時代に取り残されたということで犠牲者なのである。「多分アメリカは芸術、そして内面的な奇跡を必要としていなかった」(*Humboldt's Gift* 3) 資本主義の先頭を走るように運命づけられたアメリカで、フンボルトは≪奇妙で、喜劇的な人間≫のような行動をして、そして「彼はアメリカ的な世界（私もそうであった）から逃避しようとしている自身を考えようとした」(*Humboldt's Gift* 6) アフリカからライオンの白い子供を連れて帰国したヘンダーソンは、それで自らを慰めようとしたのに対して、フンボルトは自らの殻に閉じこもり、最後に彼は二酸化炭素の充満する大都市で孤独の中で亡くなった。彼の死はアメリカのかっての良心の終焉を象徴するものであった。「『フンボルトの贈物』の一貫性は、物質的な社会における精神の不一致である」(*Saul Bellow VISION AND REVISION* 241) フンボルトもシトリーヌもカラマーゾフの兄弟と同じように作者の分身であり、ベロー自身の揺れ動く気持ちを主人公らがただ代弁したに過ぎないであろう。孤独な死に方をしたフンボルトと違って、ヘンダーソンは自由闊達に人生を送ったのであろう。

引用資料

Beth S. Wenger *New York Jew and Great Depression* Yale University Press1996

DANIEL FUCHUS *Saul Bellow VISION and REVISION* Duke University Press 1984

Ellen Pifer *SAUL BELLOW against the grain* University of Pennsylvania 1990

Edited by Gerthard Bach *The Critical Response to Saul Bellow* Greenwood press 1995

Edited by Gloria L,Cronin and Ben Siegel *Conversations With Saul Bellow*The University Press of Mississippi 1994

Edited by Cronin L., Cronin and L.H.Goldman *SAUL BELLOW in the 1980s* Michigan State University Press 1989

Edited by L.H.Goldman Gloria L.Cronin Ada Aharoni *SAUL BELLOW MA MOSAIC* Peter Lang 1992

JAMES ATLAS *Bellow A Biography* RANDOM HOUSE 2000

James Bowldwin *The Price of Chiket* collected nonfiction 1948-1985 St.martin's marek newyork1955

Julia Eicheber *Prophets of Recognition* Louisiana State University Press 1999

Kyung-Ae Kim *Quest for Salvation Saul Bellow* Peter Lang GumbH 1994

Modern fantasy Cambridge university press

Frank d. mc *Four Postwar American Novelists Bellow Mailer Barth and Pynchon* The University of Chicago Press 1977

Lionel Triling *The last decade essays and review,* 1965-75 Harcourt Brace Jovanowic

Margaret Morganroth Gullette *Safe at Last in the Middle Years* An Authors Guild Backinprint 2000

Marianne M.Friedrich *CHARACTER AND NARRATION IN THE SHORT FICTION OF SAUL BELLOW* Peter Lang 1996

Ruth Miller *Saul Bellow A Biography of the Imagination.*St.martin7Press 1991

Saul Bellow *It All Adds Up* .London: Penguin Books, 1994.
—. *Henderson The Rain King.* London: Penguin Books 1959
—. *Mosby's Memories.* London: Penguin Books 1969
WALTER BIGLER *FIGURES of MADNESS in Saul Bellow Longer Fictions*
Peter Lang 1998

白さと想像力　アメリカ文化の黒人像　トム・モリソン　はじめに　大社淑子
朝日選書　1994
フィードラー　*アメリカ小説における愛と死*　新潮社　佐伯彰一他訳　1985
拙論　*宙ぶらりんの男*　と　*サムラー氏の惑星*　について　大月短大論集　第32号　2001